
「学生」という名の仕事

高橋 亮一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「学生」という名の仕事

【Nコード】

N9109A

【作者名】

高橋 亮一

【あらすじ】

ごく普通に中学を卒業して高校に進学した僕は、人間関係に馴染めずにいた。そして結局高校を休学し、1年後・・・もう一度学生に戻る決心を固めて、その日を迎えた。1年ブランクをあけて高校に復学するという事、1歳年下の人達と高校3年間を過ごすという事、自分をよく知っている同級生が先輩になって同じ学校にいるという事。いろいろな不安を抱えながら過ごした、僕の高校3年間を描いた話です。

第1話：「再デビュー」（前書き）

実際このような経験をされた方などに、途中、気分を害す表現があるかもしれませんが、お許し下さい。

第1話：「再デビュー」

199*年

4月10日 火曜日

8時30分 晴天。

この瞬間、若干16歳の僕は第2の人生を踏み出した。世間からしてみれば、

「何の取り柄も無い16歳のガキが何偉そうに言ってるんだ？」

．．と思われるんだろう。

確かにただのガキで取り柄も無い！ついでお金も無い！！

けど、少なくともあの時の自分は同じ16歳の、いわゆるその”ただのガキ達”より”少し大人のガキ”だったのかもしれない。

あの日．．。

多分死ぬまで忘れないであろう2回目の高校デビューの日は、同い年の先輩達が校門で新入生を歓迎している姿を横目に、存在を消すかのように学校に足を踏み入れた。これから3年間、想像以上に長く感じる。ある意味高校生活は戦争だ！なんて考えながら、校門から校舎への約50メートルの道を1歩1歩、命を削られるような緊張感、恐怖感、そして適度な好奇心を抱きながら歩いた。

気づいたらいつの間にかこの先1年間お世話になる教室のすぐ前。人間は面白いもので、極度の緊張状態が続くと頭の中が真っ白になる。正直、教室の前に来るまでの周りの状況なんて全く覚えてない。覚えているのは階段を登ったという事だけ。やっぱいいざとなると教室に入るのが怖くなる。普通に考えれば他のみんなも前日の入学式に少々顔を合わせただけで、ほぼ初対面。表面に見せず緊張して

るのは一緒だろう。なのにその

「普通の考え」

に頭が回らないのが、1つ年上の性。必要以上にアウェーを感じてしまう。

「誰かに声をかけてもらいたい」

「家に帰りたい．．．いや、逃げ出したかった．．．」

多分あの日にもう一度戻ったら何回繰り返しても、リタイアして家に帰り、生涯駄目男になっていただろう。その時だった．．。教室前廊下の壁に寄りかかっていた少年、背は160あるかないか、MDで何か音楽を聴いているのだろう。一見もの静かそうな少年と目があつた。その距離2メートル。

やつ、やばい！何か喋らないと！．．不意打ちすぎた。初対面のお約束、時候から入った挨拶やミニ自己紹介すら頭から飛んでしまっている！しかもファーストコンタクトはかなり重要！3年間の

「キャラ」

を決定させる大事な場面なんだ。

．．．なんて考えているとその少年がMDのイヤホンをはずしながら僕に近づいてきた。

「あつ、どうも。1組ですか？」

ニヤけた顔をしながら、男にしては少々高いその声は、僕の気持ちに少し楽にさせた。

「えっ！？あゝ、うん！1組1組！クラス同じ？よろしく！」

高校での記念すべき第一声は探り探りで言葉を返した。そして彼も

すかさず

「何中!?!」

キター! 高校生、会話の入口定番の質問! 伝家の宝刀

「どこの中学出身ですか?」

の短縮系! けど自分は1つ年上。出身中学に嘘をついてもつかなくとも、彼に知っている友達は1人も居るわけがない。タイミングは今だ!

「この隣の中学出身なんだけど、実は俺1年ワケあって遅れてるんだ。だから年も1歳上。あつ、別に留年したわけじゃないよ! (笑) けど全っ然、敬語じゃなくていいから!」

決して不良ではありません! という事をさりげなく強調。彼はポカーンとしながら少し間をおいて、

「えっ!! そうなんですか!?! あゝ、けど全然そういうの気にしないですから。」

「...って、思いっきり気使ってるじゃん (苦笑) ... と思うながらも、年上の自分を受け入れてくれた事が凄く嬉しかった。すると彼は、

「俺、内田っていいいます。もうホームルーム始まるんで教室入りません? えっと...」

彼は手のひらを上に向けて僕の方へ出し、

「あなたのお名前は?」

と言わんばかりのジェスチャーで言葉に詰まっていたので、

「あつ、俺、田中っていうんだ。よろしくね！」

と、自己紹介を完了し、いつの間にかみんなが着席している静かな教室へ二人で入っていた。

第2話：「クラスメイト」

教室へ入ると、一杯一杯だった気持ちが少しやわらぐ。人の言葉まで借りておいて大袈裟かもしれないけど、

「自分で自分を褒めてあげたい」

と心から思った。そして、真ん中にポツンと空いている自分の席へゆっくり腰を下ろし、さりげなく周りを探る。

本を読んで自分の世界に入っている人、誰かに話しかけたそうにしている人。

理由はどうあれ、クラス全員が音ひとつ立てずに座っている。

まるで、見渡す限り何も見えない、広大な草原のど真ん中に居るより静かなんじゃないかとさえ感じさせる。この空気に少々苦痛になり、二つ隣に座っている内田の方を覗いてアイコンタクトを試みた。しかし、当の内田も、さっきまでのテンションが嘘のように礼儀正しく膝に手を置き、猫背気味で座り、少し小さく見えた。

「お前もか・・・！」

50分後・・・

今までの人生で一番静かな授業が終わり、席を立つ。僕は急いで内田をトイレに誘い廊下に出た。

「当たり前だけど、みんな静かだったなー！」

喋るところか、ろくに口も開かずにした、その必要以上に渴いた喉で言葉を発した。

「まあ、あの教室の空気だしね・・・。」

すかさず内田も言葉を返す。

トイレで用を済ませると、入れ替わりに同じクラスの男子がぞくぞくと入ってくる。この中のほとんどは、別に用を足したいわけでもないのに、教室に居る事の出来ない同志なんだと感じた。

「田中ー！1限体育だぜ。早く行くぞ！内田も早く来いよ！」

「おう！先行つて。今行くから！」

学校生活も1ヶ月が経ち、徐々にみんな打ち解け始め、笑い声が絶えない教室へと変わっていた。男子は女子より圧倒的に生徒数が少ないせいか、全員一致団結の仲良し集団に成長し、それぞれの性格や、冗談を言える言い意味での力関係も、はつきり見えてくるようになった。逆に女子の方かというと、教室内で3グループ程度に分かれ始めている。

まず

「第1グループ」

は、授業中や休み時間を問わず常にハイテンションで騒いでいる、いわゆる典型的なギャル集団。いつの間にか出来上がっていったけど、この機会に中学時代から性格を変え、いわゆる

「高校デビュー」

を果たす人は沢山いるんだと、友達を見てきて思う。髪は茶髪、

超ミニのスカート丈、目元の厚化粧、たとえ3メートル離れていたとしても存在に気づいてしまう香水の量．．．。

自分もどちらかというとみんながやっている事や流行に流されるタイプで、彼女達の事はすぐ理解出来る。けど、なんで自然にしていた方が女性として魅力的なのに、ここまでいろんな所に入力するのか．．．と思う。

次に

「第2グループ」

授業中は普通にノートを書き、授業の話も聞く。もちろん

「勉強が好きだから」

なんて理由じゃない。ごく普通の女の子で、校則はギリギリの所で守る。

「茶髪禁止」

と書いてあったら、どっちにも転べそうな微妙な茶色にして、スカート丈も長すぎず短すぎず．．．。学校や先生に忠実な

「良い子ちゃん」

ではないけれど、無駄な争い事は絶対しない平和主義の保守派。学校で一番多いグループだ。

そして

「第3グループ」

正直、違う意味でギャル顔負けの騒音を発する。格闘ゲーム、ヒーロー物のアニメ、少女漫画、ガンダム．．．。高1の男なら主流となるゲームの話題。基本的に人、特に男は何かしらの

「オタク」

だと思う。けど、そんな

「オタク」

な自分たち男でさえちょっとヒクような知識の豊富さ。

「女の子なのに」

つていう言い方はあんまりしたくないけれど、自分達の趣味にかなりの誇りを持っているんだと、毎日感じさせられる。

表面上は3グループ共、普通に仲が良さそうに見える。けどそこには実際、女性特有の

「したたかさ」

が隠れていて、特にギャル集団と保守派の会話は耳に入れたくない。

「あー、今日の。。。ちゃんの髪型、超可愛い〜！」

・・・とギャル集団の一人が話しかければ、

「え〜、そう？・・・さんの方が全然可愛いよ！」

・・・と保守派の子もすかさず返す。それでも、

「そんな事ないよ！それに。。。ちゃんの髪って凄くキレイだね〜。アタシなんかブリーチしてるから傷みまくってるしさ！」

「けど・・・さん凄く似合ってるよ！羨ましいよ〜。」

本音がお世話かわからない、こんなホメ殺し会話がほぼ毎日朝から聞こえてくる。

向こうでは朝一の体育に眠たそうな内田が、男グループ・リーダー格の太田に捕まっている。

「おう内田！・・・ん？今日寝坊か？目の下にクマできててお前キモイよ。」

「なァー！田中も見えてみ！」

すると内田は、

「ほつとけよ！いちいちイジるなって！」

と照れ笑いする。

こういう光景を見てみると、

「あゝ、女の人って面倒くさいわ！男に生まれてきて良かった。と心から神様に感謝する。」

正直、復学前に不安に思っていた事は、

「1年のブランクで勉強について行けるのか」

「生活リズムを戻せるのか」なんて比べモノにならないくらいに

「友達は何れなのか」

だった。それがたった1ヶ月で徐々にクラスに馴染め始め、当たり前のようにクラスメイトと話している自分を思うと、ホッとしている反面、人間関係に馴染めず、たった2週間でリタイアしてしまった去年の事が呆気なく、そして複雑な気持ちだった。

第3話：「複雑」

この学校は春になると、グラウンドを囲んだ何本もの桜の木が花を満開に咲かし、見る人の心を和ませる。

「去年はこの桜が散る姿を見る事もなく、学校を離れて行ったんだよな．．．。」

数学の授業で熱弁している先生の話を経く流しつつ、ボーッと窓の外の裸になった桜を見る。

復学前、あれだけ怯えていた高校生活もいつの間にか軌道に乗り、最大の悩みだった人間関係も、いつしか勉強の悩みへと変わっていった。

朝は7時半に起き、身支度、朝食を済ませて8時半に家から学校へ自転車走らせる。

授業が始まる前までは内田、男グループリーダーの太田、そして．．．決して目立つタイプではないけれど、とても清纯で可愛らしく頭も良いハルカ、彼女の中学時代からの親友で、いつも明るく楽しそうに喋っているユキ。

僕を含めた5人の、いわゆる仲良しグループでたわいもない話を話している。午前の授業が終わると、クラスの男子全員で屋上で昼食を食べて午後の授業に臨む。放課後はその日の事や面白話を5人で楽しみ、家まで方向が一緒のリーダー太田と2人で帰る。これが僕の平凡な、そして幸せを感じる日常だ。

6月．．．。

ここへ来て新たな難関に直面する。体育祭が3週間後に迫り、軍団分けが行われた。この学校の体育祭は、1学年5クラスをそのままクラス別にチームとして、1年生から3年生がランダムに1クラスずつ、3クラス1軍団に分けられる。2年生とは階が違うから普段は会わないけれど、自分を知っている元・同級生が何人も居る。

そして、初めての軍団顔合わせの日がやってきた。

「なんか先輩と一緒にって気まずいよな。」

クラスでいつも大きい態度をとっている太田が、身を隠すように目立たずにいる。周りのみんなからも緊張感が伝わってくる。

無理もない。中学、高校時代の先輩というのは、たった一つか二つ年が離れているだけなのに、そうと感じさせない独特の空気を放っている。

「う、うん。確かにね・・・。」

けれど僕の立場上、素直に賛同出来ない自分がいた。

入学初日、僕がみんなより年上だという事を内田に話してから、年齢の話は振られなかったし、あえて自分からは切り出さなかった。もちろん復学前は不安があっても、隠すつもりや、うしろめたい気持ちも無かった。だからこそ復学初日、内田に打ち明けた訳で・・・。

けど、いざ2ヶ月が経つてみるといろんな事が頭をよぎる。

「クラスで敬語を使ってくる人は1人も居ない。僕が1つ年上って気づいているんだろうか・・・。間違いなく太田は気づいてない。それとも知っていてカマをかけているのか？」

内田には打ち明けたし、もう皆知ってるだろう。いや、内田はわざわざこの話題を切り出すタイプじゃないし、なにより口もカたい．．
」

「今更になってこんな事思うなんて」

改めて打ち明けるべきか否か、心の中で葛藤した。

今まで考えもしなかった。それと同時に、もし皆が知らなくて今打ち明けたら、距離を置かれるんじゃないかという恐怖感にかられ、こんな情けない自分を永遠と説教してやりたい気分だった。

その時だ．．．。2年生で、中学の同級生だった原田と目が合う。
そして1年生だらけの僕の所へ向かってきた。

「よっ！久しぶり！元気だったか1年生？」

ニヤニヤしながら僕に声をかける。

「うっん、まあ。」

照れながら精一杯の言葉を返す。

原田も僕のリアクションに察してくれたのか、1年生だらけの空気に気まづくなつたのか、すぐに席に戻っていった。

皆はポカーンとしている。

無理もない。この1往復の会話は、先輩後輩の仲ともとれるし、同級生ともとれる。少々疑っている人なら確信に変わる。けど、原田との関係は、誰も突っ込んでこなかった。そして何故かこの出来事だけで僕は、

「皆は自分が1つ年上だという事を知らない。どうせなら隠し通せ

るだけやってみよう。」

という結論に達し、3年間思い続ける事になる・・・。

体育祭当日。

この2週間、原田とは当たり障りのない会話で乗り切り、原田本人にも、

「悪いんだけど、氣使ってもらえると嬉しいんよ」

と伝えた。

原田はこの一言だけで察し、

「おー、O・K！O・K！いろいろやりにくだらうしな！」

つと言いながら僕の肩をポンと叩く。

中学時代は一緒にバカしてた仲なのに、もの凄く大人に見えた。友達からの、実質

「関わらないで下さい発言・・・。」

原田がどう受け止めたのか？と同時に、申し訳なさ、自分は何をしているんだ・・・。数え切れない感情が押し寄せてきた。

僕の体育祭出場種目は

「騎馬戦」、

「綱引き」

、そしてラスト種目の

「選抜リレー」

というベタなものだ。

小学校時代は学校のクラブと市のクラブチームに入るくらいサッカーに没頭していた。しかし、中学に入ると卓球少年。そんな僕でも脚だけには自信があつてのクラス選抜だった。

騎馬戦、綱引きと無事に終わり、選抜リレーがやってきた。

クラスで仲の良い、活発なユキも選ばれて、2人で集合場所へ向かう。

「みずき〜！バトン落とさないでね〜。お互い抜かれたらジュース1本ねっ！」

僕も、

「あつ、マジで？いいよ！これで終わったらジュース代浮くわ〜」

「このー！コケるように呪ってやるから！」

お互い笑顔で交わすこういう冗談は本当にほのぼのする。でも、いつの間にか

「田中くん」

から名前の

「みずき」

へ呼び方が変わっていった事には驚いた。

夕方になり、体育祭が終わり、リレーの結果はお互い抜きも抜かれもせず……。微妙な結果だったけれど、まあリレーでは一番無難な形かなと、満足だった。

土まみれになった素足を洗っていると、内田とハルカが小走りにやってくる。

「お疲れ！リレー見てたよ」

と、ハルカが言えば、

「結構必死だったよね！？」

と、内田も笑いながら言う。

校庭裏、体育祭裏話で盛り上がっていると、ハルカが何かふと思いついたように言った。

「あれ？そういえばユキ知らない？」

確かに。リレーが始まる前に顔を合わせたつきり、全然見ていない。僕はリレーが終わって、クラスの男子達と話していたし、言われてみたら閉会式でも見当たらなかった。すると内田が、

「実は今日、太田くんがユキちゃんに告白するんよ……。」

「えっー！！」

僕とハルカは言葉を失った。

ハルカはすぐに受け入れて、今日はもう帰ろうと提案したけど、僕は複雑だった。

別にユキが好きという訳ではない。もちろん友達としては大好きで、大切な存在だけど、今まで恋愛経験ゼロの僕は、友達としての好きと女性としての好きがまだ理解出来ず、自分はまだまだだと思う反面、太田は凄いなと感じた。

結局、僕の興味本位かわがままかわからないけど、3人で告白現場を探す事にした。

校舎中を探し回り、この時間は誰も行かない屋上へ向かう階段の踊り場で2人を見つけた。

僕達はバレないように近くのトイレ前で聞き耳を立てた。

けど、2人はかなりの小声で話していて、全く聞こえなかった。

第4話：「親友」

3人で声を潜め、どれくらいの時間が経ったのだろうか……。相変わらず太田とユキは階段から降りてこない。ハルカが小声で言った。

「私たち何やってるんだろうね。」

返す言葉もない。正論だ……。こういう事は興味本位で盗み聞きなんてしちゃ駄目なんだよな。ハルカの一言を聞いて耳が赤くなっ

た。

その時だ！

階段を下る足音が二つ。

「えっ？うまくいったの！？」
なんて思っていると、

「田中くん！こっちこっち！」

内田とハルカが教室の中へ駆け込み手招きする。僕は急いで教室へ逃げ込み、また3人でしゃがんで隠れた。僕達が潜んでいる教室の前を太田とユキが通る。

「今度みんなで遊ばーよ！太田くん居ないと楽しくないし！……駄目……かな？」

ユキの声だ！

「おう！めっちゃ盛り上げてやる！」

今度は太田の声。

2人は遠く離れていった・・・。

言うまでもなく僕達の結論は一致し、ほとんど会話もせず校門へ歩いた。

内田とハルカは何を思ったんだろうか？僕は正直、太田とユキにはくっついて欲しかった。人の幸せを心の底から祝福出来る人なんてそうは居ない。自分に余裕がなかったり、不幸せな人なら尚更だ。けど、こいつにはへこんで欲しくない！幸せになって欲しい！なぜかはわからないけど、そう思う自分がいた。

帰り道。

外は日が沈みはじめ、空一面をオレンジ色に染めていた。僕は2人と別れ、1人いつもの道に自転車走らせる。

家に帰る途中の踏切でボーっと止まっていると、携帯電話が鳴り響く。誰だ？と思って携帯を開くと

「太田修二」

の文字。

僕は踏切を少し離れながら電話に出た。

「もしもし。どうかしたん？」

「今、家？大丈夫？ちょっと学校の横の公園に来れる？」

「帰ってる途中だけだよ・・・。何、何！？気持ち悪いって！」

「あつ、いや、ちょっと話あつてさ・・・。」

僕は、明らかにテンションダウンしている太田が心配になり、

「わかったわ。今から行くから。」

と言い電話を切った。

急いで帰って来た道を引き返す。公園に着くと、太田が寂しそうにベンチに座っていた。太田が僕に気づき、

「おう！悪いね．．．！」

と言いながら僕にジュースを手渡す。太田の横に座り、この時間に男2人が公園のベンチに座りながら深刻なムードになる。なんて気持ち悪い光景なんだ！そう思いながらも太田の話を聞いた。

「さっき告白聞いてたろ？3人してバレバレだから．．．。」

あつ、やっぱりバレてたか！と焦りながら、

「いや、2人が居なくて探してたらたまね！」
と、苦し紛れに返す。

「まあいいけどね。あー！駄目だったわ。俺ユキの事めっちゃ好きだったんだよ。先月、調理実習あっただろ？あいつバカなのにかなり家庭的で。」

ほら！俺って家庭的な子がタイプじゃん！？」

「いやいや、知らねーよ！！」

「最後まで聞けって！．．．それでユキといると楽しいし、ホントの事言っと、田中と盛り上ってるユキ見ると嫉妬してた．．．。その時に、やっぱり俺はユキの事が好きなんだって．．．。ユキは俺の事、恋愛対象に見れないって言ったんだけど、夏休みにみんな

でどこか行こう！って。普通こんな事言わないよな！？俺行ける訳ないじゃん！！」

太田は悲しさと怒りが入り混じったように、興奮しながら僕に感情をぶちまけた。

僕は人にアドバイスしたり、励ましたり出来るような立場じゃないし、経験もしていない。けれど、初めて見る太田の脱力した姿を見て、何か力になれないかと思った。

「太田の気持ち、めっちゃわかるよ。けど、ユキも太田の事好きだからこそ、これで関係が気まづくなつて離れるのが嫌だからこそ、そう言っただんじゃない？」

同じ学校、しかも同じクラスにいる限り、忘れろ！って言う方が正直無理だと思う。けど、一回区切りついたんだし、頑張つてちよつと見方変えてみれば？それでも好きなら告白なんて何回してもいいと俺は思うし……。ただ、わかってもらいたいのはユキの気持ちも理解してやって欲しいって事。あいつなりに太田の事考えたんだしさ！」

僕は、今言える精一杯の言葉を太田に返した。それを太田は真剣に黙って聞き終わった後、少し笑みがこぼれた。

「お前も何熱くなつてんの？なんか恋愛の話なんて恥ずかしいよな！悪いね！今日の事は忘れてくれ！」

僕の熱弁が逆に冷めさしてしまったのか、さっきまでのテンションが嘘のように笑いながらあっけらかんとしている。

これで良かったんだと思う。恋愛経験ゼロの自分が言うのもなんだ

けど、

「太田！お前は成長したぞ！」

こんなクサイ台詞を心の中に留めながら、太田と体育祭話で盛り上った。

外はすっかり暗くなり、ライトアップされた車たちを横目に自転車のペダルを漕ぐ。自転車を走らせながら僕は、

「今更だけどジュース、サンキューな！」

太田はニヤリとし、

「いや、わざわざ世話になったし。お前もちょっとは良い事言えるんだな。ただのヘタレだと思ってた。まっ！恋愛相談なら俺がいつでも乗ってやるよ！」

こんな事が言えればもう太田も大丈夫か……。と思いつつも冗談で反撃。

「あゝ、今日せっかくデートだったんだけどな。誰かさんの失恋話で潰されたわ！」

「へえ、それは悪かった。……って、誰とだよ！嘘つけ！！」
けど、ホントにありがとな。ヘコんでたからさ……。またなんかあったら頼むわ！……セン・パ・イ！」

僕は太田の言葉にかなりの衝撃を受け、自転車を止めた。太田を見

ると、

「あれ？気づいてないとも思った？とっくに知ってたよ。田中は入学式に居なかったし、もしかして．．．って思って内田に話してみたら1つ年上だって。」

僕がまばたきも忘れてる顔を見ながら、太田は爆笑している。

僕は動揺しながら自転車をまた漕ぎ始め、

「えっ？しっ、知ってたん！？じゃあハルカやユキは？クラスのみんなは！？」

「さあ．．．。誰も知らないんじゃない？俺も最初はそれ聞いて絡みづらいわ．．．！って、気使うし関わりにくかったけど、最初こっちに話しかけて来てくれたのは田中の方だし、頑張つて溶け込もう感もめっちゃ出てた！それは受け入れないと。壁作る理由も無いだろ？敬語で話さなきゃ！って思った時もあったけど、それじゃあ逆に田中がやりにくいかな？って．．．。タメ口きいて怒られてたら、ソッコー敬語に切り替えてたぜ！まっ、今は敬語で話せて言われてもお断りだけど。それに、一緒にツルんでも絶対年上には見えなishina！」

太田は相変わらず笑いながら言った。

涙を必死でこらえて作り笑いをする。嬉しくてたまらなかった．．．。
。返す言葉がなかなか見つからなくて、

「じゃあ2年との顔合わせの時も、知ってて、先輩やりにくいよな．．．？とか言ってたん！？」

照れながら、こんな事しか聞けなかった。

「顔合わせ？俺そんな事言ったか！？よく覚えてるな！まあ、もし言っただんなら面白半分だな！」

気がつくのと、太田と別れる道に辿り着く。

「じゃあ明日な〜！」

家までの1人の帰り道、僕は泣いた。本当はもっと前に思いつ切り泣きたかった・・・。

僕が1つ年上だという理由は、あえて聞いてこなかったのかもしれない・・・。

けれど、友達に恋をして、失恋して公園でヘコむ。自分の事だけでなく、人を理解して受け入れてくれる。毎日太田を見ていると、思いやりもあって、悪口や陰口なんて絶対言わない。

こんなにも純粹で、時にはムードメーカーな最高の少年・・・。

僕なんかにはもったいないと思う反面、この男が何か困った時は助けになりたい！一生大切にしたい

「親友」

なんだと、心から思った。

第5話：「魅力」

7月下旬

ついに！いや、いつの間にかこの日がやってきた。

1学期の終業式。

復学前、まさかここまで学校でやっていけるとは考えてもみなかった。

「学校が楽しい！」

今なら胸を張って言える。

教室で席が近い、ギャルリーダーの相田に声をかけられる。

「田中くん、通知表見せてー！」

あゝ、こいつの手に渡るとマズいなと思いつつも、

「いいよ。じゃあそつちも見せねえ！」

僕は内心、渋々交換に応じる。

「えー！？凄げーじゃん！クラス3位！しかも数学1位！」

予想通り……。

相田の爆声でクラス中が僕達2人に注目する。なんでわざわざ発表なさるんですか？あなたは……。こつちも仕返しで、この非常に残念な通知表を発表してやろうか！と思ったけど、このクラスは男3割、女7割。主導権を握ってる女子の、しかもリーダーの通知表を公表する事は、クラスで干されるところか死に等しい……。

そこは怒りを抑え、

「おい！マジで声デカいから！じゃあ相田さんのも言っていないん！？」

自分のレベルではこれが限界だった・・・。

「ごめ〜ん。シーっね、シー！」

口の所に指をもってきてナイショ！のジェスチャー。

女の人がこのジェスチャーをして、これほどまでに腹が立ったのは初めてかもしれない。

学校が終わり、校庭に太田達5人で集まる。

太田とユキは、なぜか今まで以上に親密になっている様に感じる。CDなどの頻繁な貸し借りはもちろん、最近は太田がユキを駅まで送っていつている。おかげで帰りはたまに他のクラスメイトと帰るとして、マイナーな道だけにほぼ1人・・・。お前ら付き合っちゃえばいいんじゃないの？これは、内田、ハルカはもちろん、多分クラス中が思ってる事だろう。

夏休み。

朝、この異常なまでの暑さに耐えきれなくなり僕は目覚める。

数時間前までタイマーで作動していたクーラーの効いた心地よい部屋は、一気にMyサウナへと変わっていた。

僕の2年ぶりの夏休みは、アルバイト漬けの毎日とテレビ観賞。

アルバイトは地元のスーパーで1年前からやっていて、ソコソコ板についているつもりだ。

僕は自分で言うのもなんだけど、人付き合いが上手い。職場の上司との雑談に相づちを打ち、ミスをして怒られても最後は笑いにかえる。社員とアルバイトという距離感のお陰なのか、ストレスなんて感じた事はない。

もちろん職場に恵まれて、自分を取り巻く人間に嫌いどころか苦手な人など1人もいない。学校とは違った楽しみがここにはある。

人付き合いが原因で学校を休学してしまった事を思うと、ここでアルバイトを始めた事は、自分を成長させてくれたのかもしれない。感謝してもしたりない、この店は自分にとってもう一つの我が家なのだ。

8月上旬。

太田とユキの発案で、僕の地元の花火大会をみんなで見に行く事となった。

夕方、僕はTシャツとハーフパンツの無難な夏スタイルで、現地で内田と待ち合わせる。行き交う人は家族連れとカップルばかり。とても居づらい状況の中、内田を待った。そこへ、

「田中くん久しぶり！」

シャツに、リメイクされたタイトなジーンズ。手首にはオシャレな小物が身に付けられ、Tシャツの下にはネックレスらしきモノも見え隠れする。

実は私服を拝見させて頂くのは初めてで、内田が服に気を使う人だったのかと、なぜか少しショックを受けた。

「お前オシャレさんだなー！ビックリした・・・。」

「なんで！？普通だよ！．．．ていうか田中くんラフすぎだね？」

「そりゃあ夏だからね。動きやすければ全てよし！」

内田とファッショントークで盛り上がっていると、そこへ太田が自転車で見える。

「おー！お前ら早いなー！」

僕と内田は笑いながら顔を見合わせる。さっきの内田への言葉は訂正させて下さい．．．。上には上がいた！

基本はB系スタイル。そこは大体予想はついていたけど、まるで輩の域に達しそうなくらいのガラTシャツ、ダボダボのカーゴパンツ、指には、私は悪社長です．．．と言わんばかりのゴツいリング。しかも両指．．．。髪は金髪に染められている。

「あんた．．．誰？」

僕は爆笑しながら太田に言う。何か文句でも？という表情で太田は、

「夏だから弾けないとだろー！それに花火だしな！」

いや、弾けすぎですよ．．．あなたは．．．。

そうこうしているうちに辺りは暗くなり始める。いよいよ花火大会の始まりだ！

その時、ハルカとユキが小走りにやってきた。

「ゴメン！遅くなって。まだ始まってないし、ギリギリだね！」

僕は、

「いや、ホントギリギリだよ。言い出しっぺのユキが遅れてどうすんの？」

笑いながら冗談を言っていたけど、そんな事よりハルカとユキの浴衣姿に言葉を失った・・・。

元氣印のユキは、普段からは想像もつかないくらい清楚にキメ、特にハルカはいつもより断然色っぽく、髪を束ねた姿には胸がドキツとした。

「ドーン！！・・・」

花火が打ち上げられはじめ、僕達は人つ気の少ない土手沿いへと歩いた。

相変わらず太田とユキは2人で前を歩き、今日の変貌ぶりに太田はユキにイジられている。

内田は持参してきた使い捨てカメラを構えながら花火に集中し、僕はハルカと2人で歩いた。

「なんか太田くん変わりすぎだね・・・。私、最初誰なのかわからなかったよ。夏休み限定だね！」

「いや、意外とあいつは夏休み終わっても金髪かもよ。それよりユキとハルカの浴衣の方が衝撃だったわ・・・！」

「どつという意味〜！似合ってる？」

ハルカの笑顔がこんなにも可愛らしく見えたのは初めてだった。時折鼻に届く香水の匂いも手伝って、一段と大人の色気を感じる。

「うん、めっちゃ似合ってる！なんか違う人みたい。女の子って浴衣着ると可愛くなるよな！」

いつもと違うハルカに緊張しながら会話を続ける。

「ありがと。着て来たかいあったよ。」

田中くんには見てもらいたかったんだ。．．．あつ、もちろん太田くんや内田くんにもね！」

ハルカの意味深な言葉もまだ理解出来ず、土手に座って5人で花火に声をあげる。

楽しい時間は本当にあつという間に過ぎ、僕も含めて焼き増しの依頼が殺到の、圧倒的1番人気・内田が困りながらも承諾して、夏の花火は終わった。

1人の帰り道、僕はハルカの言葉が引っかかっていた。深く考え過ぎているのは自分でもわかっている。けれど、今日のハルカに友達とは違う感情を抱いたのは事実なのかもしれない．．．。

恋を経験した事がないウブな僕は、その感情が何だったのか？と考えながら夜道を歩いた。

第6話：「別れと出会い」

「オッス！久しぶりー！」

「わぁー！凄い変わったね！」

久しぶりの対面に、あちらこちらで言葉が飛び交う。

2学期の始まりだ。

僕は中学時代から、2学期の初日が楽しみで仕方ない。いわゆるイメチェンを試みる人が多く、ミニ同窓会みたいなものだ。

日焼けで真っ黒な肌が変わったスポーツマン、ストレートパーマでサラサラヘアーに大変身したクセ毛少年、少しだけスカート丈を短くした物静かな女の子、長い髪の毛をバツサリとショートカットにした女の子、化粧デビューを果たした子……。むしろこの時だけは、ギャル集団の存在感が負けている。

案の定、太田は金髪頭を坊主頭に変え、

「なんで坊主なん！？」

と、周囲を驚かす。

授業が始まると、深刻な顔をしながら先生が口を開いた。

「えー、まず、みんなに残念な報告をしなければならない。実は佐々木が学校を休学する事になった。詳しい事は言えないけど、学校生活に鬱ぎみになってしまったな。先生も話し合っただけで、本人の希望でこうなってしまった。突然の事でみんな驚いてるだろうけど、佐々木の気持ちもわかってやってくれ。」

えっ、佐々木が．．？なんで．．。

授業中、僕はずっと上の空だった。佐々木は入学した時から、明るく、人なつっこい性格でみんなに好かれる奴だった。とても悩んでいる様子には見えなかっただけに、佐々木の気持ちを考えるとなぜか悔しかった。

ふと周りを見渡すと、みんなは相変わらず授業に集中していない。佐々木の事でも考えているんだろうか．．？目に涙を浮かべている女子もいる。それはそうだ。

クラスメイトがいきなり一人居なくなる．．。

例えばその人が佐々木になんの特別な感情が無かったとしても、その予想外の出来事は何か考えさせられるものがあるのだと思う。

授業が終わり、急いで僕は階段を下る先生の元へ走った。

「先生！佐々木、何があつたんですか？なんで学校辞めるなんか．．。」

「．．あいつ、入学した時から無理してたみたいなんだ。友達作るのに必死で、毎日一杯一杯だったらしくて。みんなと仲良くなつても、嫌われないようにって気負つててな。１学期が終わる頃から辞めたいって相談されてたんだよ。少し落ち着いたら仕事探すらしいんだが．．。とにかく気にするな！まあ、お前が心配するのはわかるがな。」

その日、結局僕は一日中考えていた。佐々木が辞めた事、連れ戻したい！いや、そんな事じゃない。

佐々木の気持ちを察せていたら、もしかしたら少しでも力になれたのかもしれない。そして、僕が去年学校を休学し、復学してきてい

るという事を佐々木が知っていれば、どう感じたんだろうか．．．。それとも知っていたのか？

悩みは一人で抱え込むものじゃない。家族、友達、悩みを聞いてもらっただけで、どんなに気持ちが楽になるか．．．。自分がよく知っている。

先の事なんて誰もわからない。何が正しくて、何が駄目なのかわからない。けれど、今の結論が間違っていたと後から気づいても、またやり直せばいい。それでいいんだと思う。

何事もじっくり考えて、それで出した結論なら自分を貫き通してほしい。

何度でも言うよ。

大切なのは、一人で抱え込まない事。

佐々木が来年、学校に戻ってくるのかはわからない。けど、佐々木には気持ちを強く持ち続けてほしい。

それがエゴだとしても．．．僕の、佐々木への願いなんだ。

10月

去る者もいれば、来る者もいる。

僕たちが、学園祭のクラス催し物

「"闇"たこ焼き屋」

の出店構想で頭が一杯のこの時期に、転校生がやってきた。

「どうも、はじめまして。え〜っと、長谷川真希っていいです。まだ学校の事全然わからないので、よろしくお願いしま〜す！」

外見はおっとりとした雰囲気を出し、お嬢様という程ではないけれど、いかにも

「清楚」

という言葉が似合う女の子だ。

早速、ギャル集団が目を光らせ、査定でもされてるのだろうか・・・？新しい高校生活、奴らの軍団に入隊されない事を心から祈る。それに、家庭の事情という事だけど、高校でも転校があるんだと初めて知った。まあ、高校での転校も当たり前の事なんだけど、転校生というものに縁の無かった僕は、新鮮な気持ちでいた。

1週間後の日曜日。

ギャルリーダーの相田が、長谷川真希の歓迎会という事でカラオケを企画した。

僕と太田も相田に捕まり、参加する事になった。

「ていうか今日誰が来るん!？」

太田と駅で待ち合わせ、僕と合流しての第一声。

「いや、わからん!とりあえず長谷川さんと相田グループだろ?・・・あとは・・・」

僕たちは不安を抱えながら予定のカラオケボックスへ向かった。到着すると、すでにみんなが入り口前で待っている。

案の定メンバーは、相田を含めたグループ数人と長谷川さん、そして．．．えっ？これだけ！？しかも男は僕と太田の2人だけ。これのどこがクラス歓迎会なんだ？ただの相田グループ勧誘会じゃん！．．．なんて思いながらカラオケボックスの中へ入った。部屋へ入ったと同時に相田が、

「はーい！じゃあアタシ最初に歌っていい！？」

と、挙手しながらも、すでにマイクはちゃっかり右手で握りしめられている。

おいおい．．．。普通はとりあえず長谷川さんに振れよ。

しかも多分かなり歌い慣れているんだろう。今流行りの曲を、振り付け付で鼻にかけて熱唱する。

カラオケも1時間が経過し、予想通り僕と太田、長谷川さんはカヤの外．．．。彼女たちはノリだすと周りが全く見えなくなる。リモコンとマイクは独占、長谷川さんへの気遣いすら放棄中。しかも太田は、なにやらユキから電話がかかってきたらしく、店の外に出ている。

僕は長谷川さんの肩をたたき、扉の方を指差して

「部屋出ない？」

のジェスチャー。

僕と長谷川さんは、ドリンクバーのコップ片手に部屋を出た。

「大丈夫？なんか空気合わなさそうだったからさ。」

「うん、なんかみんな凄いな．．．。もう輪が出来てる所だから。」

入りにくいのはしょうがないよ。田中くん．．．だっけ？ありがとう。」

「まっ、相田軍の結束はハンパじゃないからね．．．。しかも太田のやつもまだ戻って来ないし！」

「あゝ、そういえば彼どこが行ったの？途中からいきなりいなくなっただけ。」

コップにウーロン茶を注ぎながら言う。

僕はカプチーノを飲むためにコップからカップに替え、

「クラスにユキって子がいるんよ。自分もその子とは仲良いんだけど、太田とはかなり親密でさ。」

長谷川さんは、壁に寄りかかりながらウーロン茶を一口飲み、

「へえゝ、けど付き合ってはいないんだ？なんかクラスで溶け込めない雰囲気いゝ．．．。」

「そう？．．．それ、少なくとも今日のメンツには溶け込めなくて言ってるようなもんだよ。」

僕はちょっとイジわる気味に笑いながら返した。

「違う！違うよ！そういう意味じゃなくて．．．アタシ、人見知りがあるっていうか、人間不信っていうか．．．。前の学校でいろいろあってさ。」

彼女は顔をうつむけた。

「長谷川さんゴメン．．．。変な事言つて。けど、溶け込もうとか、まだあんまり深く考えない方がいいんじゃない？そう思うのはわかるけど、その事で神経質になって、学校やめちゃったやつも知ってるしさ。体調崩したら最悪だし。」

「そうなんだよね．．．。うん！じゃあマイペース！マイペース！ありがとう。ねえ、そろそろ戻る！」

部屋の扉を開けると、帰ってきた太田がロックを熱唱中．．．。相田たちは爆笑している。相田は僕に気づいて手招きして大声で耳打ち。

「ちょっと！ずっとどこ行つてたの！？最後みんなで歌い回しするからね！」

翌日。

高校生活にも慣れたせいか、僕はいつものように遅刻ギリギリに教室へついた。

窓の近くで太田と内田、ハルカとユキのいつものメンバーに、長谷川さんも加わって話をしている。

僕に気づいた内田が向かってきて、

「昨日、相田会の餌食にされたみたいだね！」

コラッ！声が大きい！

教室の最後列に席を陣取っている相田が、チラッとこちらを見る。

僕は急いで内田を廊下に誘導し、

「いつの間に長谷川さんと仲良くなったん!？」

昨日、人見知りがあると聞いていたので、違和感なく溶け込んでいる長谷川さんに少し驚いた。
すると内田は、

「太田くんが声かけたんだよ。昨日はお疲れ!・・・みたいな感じで。それで改めて、僕やハルカちゃんとユキちゃんにも紹介してくれてさ。」

「ほらー!教室入れー!」

向こうから担任が歩いてきて、僕と内田を急かさせる。教室のみんなも担任が見えて、ダラダラと自分の席へと座っていく。

僕が席に向かう時、長谷川さんとすれ違い、彼女はニコツつとしながら、

「田中くん!これからよろしくネ。」

「お、おう!・・・よろしく!」

彼女の後ろ姿はとてもイキイキしていた。
僕は嬉しかった。

新しい仲間が増えるのはとても良い事。彼女が前の高校で何があったのかはわからない。けど、そんな事は自分たちには関係ないんだと思う。今、彼女の心の中は、外見からは想像もつかないくらい、学校に慣れようと頑張っているんだ。気遣いや気負いなんかもない、純粹に高校生活を楽しめたら言う事はない。

「“今”を精一杯楽しむ。学校は楽しい所にも変わるんだ。支えになれれば！」

それが、去年リタイアしてしまった僕の．．．、佐々木の胸中に気づけなかった僕の出来る事なのかもしれない。

授業が終わって、僕はトイレに向かおうとしている長谷川さんを捕まえた。

「長谷川さんが朝話してたグループ、みんな良い奴ばかりだから。なんかあつたらなんでも相談してさ！」

「．．．知ってるよ。」

「えっ．．．？」

「さっき、太田くんたちが話してるの見てわかるよ。アタシ、前の学校だとあんなに笑えなかったし。なんか．．．頑張れそうな気がする！仲良くしてネ！
じゃあ、ちよつとトイレ行きたいから！」

彼女は小走りに去っていった。

強い．．．。僕なんかより心が断然強いよ。復学して数週間、僕は毎日、常に必死だった。

「頑張れそう」

とか、

「みんなと仲良くなるう」

とか、そこまで考える余裕がなくて、学校に行くというだけで重圧に押し潰されそうだった。

「これから学校でみんなとたくさん思い出を作っていこう！」

この出会いを大切にしたい。
・ ・ ・と感じた1年の秋だった。

第7話：「新クラス」

学園祭も無事に終わり、冬休み、クリスマス、3学期と、特に変わった事もなく、月日はあつという間に過ぎていった。学校では適度に勉強し、みんなと喋って、時にはバカをして……。休みの日には主に家でのんびりしているか、たまに太田と内田で街に繰り出す。バイト仲間も増え、僕はこの平凡で、楽しい時間が一生続けばいいのにな……。と願った。

春休み。

僕はいつものようにバイトを終え、外へ出て携帯電話をチェックする。

着信履歴に

「内田」

の文字。

僕は自転車をこぎながらリダイヤル。すると、1コールで内田が電話に出て、

「あつ、田中くん！？なんで今日学校来なかったん！？何回電話しても出ないしさー！」

僕はなんの事かサッパリわからなかった。学校？……。いやいや春休みじゃん！こいつは何言ってるんだ？

……。ん？まてよ。今日は確か、新しいクラス発表日！しまった！完全に忘れていた……。！

「悪い、内田！クラス発表、忘れててバイトしてた……。！」

内田は呆れた感じで、

「おーい！！・・・何してんの！まあそんな事だと思ったけどね。」

「

「ごめん！マジでごめんっ！みんな来てた？・・・あつ、それよりクラスどうなった！？」

「うん、田中くん以外みんな来てたよ。クラスはねえ・・・どこから聞きたい？」

「なんだその”じらし”は！！
うーん、まあ内田も気になるけど、焦点は相田が何組になったのか？・・・だな！」

正直、あのボスとだけは避けたい。絡みづらい・・・だけならまだしも、授業中、毎回のように担任と一発発火の空気を作る。机に鏡を置いて化粧チェック、そして常に携帯を離さない。もちろん誰も迷惑はしてないし、授業を聞いているか聞いていないかは自己責任。僕も別に悪い事だとは思ってもいない。

けど、教師は許すはずがない。注意を施し、しまいには怒鳴りつける。

相田もその時点でおとなしくしていればいいのに、いつも無理がある理由のおまけ付きで逆ギレの展開・・・。

このお約束のくだりだけは毎回うんざりする。教師も不機嫌になり、こっちまでとばっちりを受ける日も多々ある。

僕の質問に、内田は急にハイテンションになり、

「おめでとう！！地獄行き決定です！」

ちなみに太田くんとも一緒だよ。僕は違うクラスだけどね。」

「なっ、なにいー！？また相田と一緒にい．．．！死んだわ．．．」

そっか。内田は一緒にじゃなかったか．．．。まあ同じ階だしな！」

「まあね。しかも隣のクラスだし！

あつ、そうそう！ハルカちゃんも田中くんと同じクラスだよ。ユキちゃんと長谷川さんはバラバラになっちゃったけどさ．．．。」

「えっ？ハルカも一緒か。うん、なんか気が楽になるね！内田も頑張れよ！毎日ちよっかい出しに行くからなー！」

「うん、来なよ！僕もそっちに絡みに行くから！多分ユキちゃんと長谷川さんもたまに行くんじゃない？特にユキちゃんは太田くんに会いに毎日行きそうだけど。」

「確かに！あいつは確実に来るな．．．。」

終始笑いが絶えない、クラス報告の電話も終わり、僕はこれから来るこの新しい高校生活に、胸の高鳴りを抑えられないでいた。

4月。始業式。

無事に2年生を迎え、また新たな高校生活がスタートした。校庭で明らかにまだ初々しい新入生を見ると、復学して1年間が終わったんだなあ．．．と改めて実感する。

僕は始業式が終わるとすぐに、1年の時に担任だった先生の元へ向かい、去年学校を休学してしまった佐々木の近況を尋ねた。

「先生！結局佐々木は戻って来たんですか！？」

「んっ？おう！田中か。．．いや、あいつは先月、地元の自動車整備工場に就職したらしいんだよ。お母さんから連絡があつてな。先週、正式に退学届を出しにいらつしゃって．．。佐々木も頑張ってるみたいだぞ！まあ良かったんじゃないか。」

先生は、僕の肩をポンとたたき教務室から去っていった。

何かホッとした。佐々木はあいつなりに、また新しい生活を始めているんだな。例えばそれが佐々木のゴールでなくとも、一歩前に進んだ事は間違いない。佐々木は僕と違って、

「復学」

が答えにはならなかったけど、いつの日か、また逢える日が来る事を信じて。その時はお互い笑い話に出来るのかな？．．いや、笑い話になっていくんだろう。

1年生の時とは階も変わり、これからまた1年間お世話になる教室の前で、太田とハルカに久しぶりの対面。

「あつ！田中くん久しぶり！また一緒だね。よろしくー！」

「おう、田中！またお前と一緒にだよ。せっかくキャラでも変えてモテ男目指そうと思ったのになー！」

まっ、腐れ縁ってやつ？これで来年も一緒のクラス決定か．．。

その通り。ほとんどの高校も同様かもしれないけど、この学校も、

1年から2年へ進級する時にだけクラス替えが行われる。つまり、この2年生のクラスが来年、必然的に3年生へとそのまま進級するのだ。

「いいじゃん、いいじゃん！太田とハルカが3年間一緒に良かったわ！．．．問題は相田ともこれから2年間一緒に事．．．。」

僕のローテンションにハルカはニヤニヤしながら、

「えー！？なにいう？田中くんも相田さん苦手なの？．．．けど何気に相田さんって、みんなに苦手がられてるよネ！？特に男子！」

太田が間髪入れずに僕の言葉を代弁。

「当たり前じゃんか！あいつと対等に絡める奴なんかいないぞ！．．．ん？．．．て事はハルカも相田の事避けてるんか！？」

「うゝん．．．。避けてるっていうか、ちょっと気使っただけ。この前も化粧の話してて、ホメ殺されてさ．．．。ハルカちゃんは大きくていいよねゝみたいな。こっちもどう言っているのかわからなくて．．．。」

始業のチャイムが鳴り、僕たちは急ぎ足で教室に入り、名簿順に決められた席に腰を下ろす。

周りを見渡すと、良く知っている人、見た事があるな．．．という人、全く知らない人．．．と、様々な顔が並ぶ。ふと隣を見ると、そこには見覚えのある奴が！

「三上だ．．．！」

三上とは1年の時に隣のクラスで、2クラス合同で行う体育で一緒になり、ソコソコ話す仲だ。

この三上という男は、学年で1、2を争う超イケメンで、身長も高く、部活に入っていないのにスポーツ万能。ユーモア満載で、かと言って全く出しゃばらないし、カッコもつけない。人への気づかいも出来る。とても年下には見えないくらい大人な雰囲気を出し、昨年の体育祭では、1年生ながら選抜リレーのアンカーを務めトップでゴール、頭の方もかなり良い。

もちろん女子がこいつを放っておくわけがない。いつも周りには学年の壁を越え、女子が集まっていた。

どこをとっても一生僕には勝てる要素が一つも無く、年下ながら憧れの存在だ。

僕が三上に声をかけようとした時、三上もこちらを向き先手を取られる。

「おう！田中も同じクラスだったんだ！？」

「・・・みたいだね。よりによってお前と一緒にかよ。これで毎日、三上のモテっぷりをこの距離で見なきゃいけないって結構ツライぞ！」

僕の冗談にも本音とも取れる言葉に三上は照れながらも、

「まあまあ、そんな事言うなって。俺だっているんな意味で結構ツライぞ！」

俗に言う

「モテる男も辛い」ってやつか・・・。

けど、こいつが言うのと全くイヤミに聞こえないのも悔しさを感じる。

新しい担任の自己紹介、ホームルームも終わり、休み時間に入る。
三上と話したいにも、三上に注がれる女子たちの視線に少々気まずくなり、僕は席を立って廊下に出る。

廊下では案の定、太田とハルカ、そして内田とユキ、長谷川さんがこちらのクラスまで足を運び、早速新しいクラスの報告会を行っていた。

「やっぱりここは居心地いいわ。」

僕はそう思いながら話に加わる。

そして、僕を見てユキがいきなり、

「ちょっと、みずき！！三上さんと隣の席なんだってー！？羨ましいい。」

あゝ、お前もミーハーか・・・と思いながらも僕は、

「えっ、何？ユキって三上の事好きなん？」

明らかにムスツとした顔を見せている太田を気にしながらも、そこは直球勝負。するとユキは、

「ううん、違うよー！ただ、めっちゃカッコいいじゃん！！だから羨ましいな。」

太田は少しホツとした表情を浮かべながらも、

「だよな。ユキなんか三上に相手にもされね。」

「ちょっと、ヒドい！何それえ〜！！そんな事言うからアンタはモテないんじゃないのー！？」

「なっ．．．！バカ！俺なんか地元でめっちゃモテてるぜ！ユキなんかより全然可愛い子ばっかだしな〜。」

「あーそうですか！それは良かったですねえ〜！．．．もう絶対ノートも見せてあげないから！」

なっ．．．何？このやりとり．．．。こっちまで恥ずかしくなるわ！それと同時に、この2人を見ていると、ホントにお似合いだと感じる。今はどんな距離感なのか．．．？最近は大田もユキの話を全くしなくなった。だから余計に2人の関係が気になっているのかもしれない。

大田とユキの微笑ましいやりとりをみんなで見ていると、突然長谷川さんが喋り出した。

「はい！ちょっとみんなに報告があります！」

大田とユキも話をやめ、僕たちは改まった長谷川さんを見つめてキョトンとする。

「．．．え〜と。実はアタシ、彼氏が出来ました．．．！」

時間が止まるというのはこういう事だと初めて気づいた。

「ええー！？」

僕たちは口を揃えて衝撃を受ける．．．。

別に長谷川さんに彼氏が出来た事に驚いたわけではない。

顔も良い、スタイルも良い、性格も言う事ない。彼氏が出来ても当然．．．だと思うのは当たり前だけど、なんていうか．．．いざ、仲の良い友達に恋人が出来ると、自分が付き合っているわけでもないのに奪われた！．．．と思ってしまうというか、みんなから距離が離れていくんじゃないかと大袈裟に考えて、不安になってしまう。

「えっ、えー！？誰と？アタシたち知ってる！？．．．ていうかいっから！？」

ユキの喰いつきっぷりに長谷川さんも照れながら、

「．．．うん。あんまり大声出さないでよ．．．3年2組の巻さ
んっていう人。なんかアタシの事一目惚れしてくれたみたいで．．
。1月に学校で、アドレス書いた手紙もらったんだ。良かったらメ
ールしませんか？みたいな。それで普通にメールや電話してて、凄
く良い人なのネ。昨日いきなり告白されて、それでアタシもこの人
ならいいかなって。」

ユキだけに任せず、僕も質問に加わる。

「じゃあそれって、まだ完全にその人の事、好きになってないって
事？それで告白O・K・したん？」

「．．．どうなんだろうネ。けど、話してる時や、一緒にいる時間
は好きだなって感じるし。だからまだ100%好きだって言えない
のかもしれないけど、付き合ってからこの人の良い所、もっと一杯
見つけていきたいな！って思えたし．．．。」

内田が口を開く、

「おめでと〜！僕たちのグループで第1号だね！」

内田の言葉に太田は、

「失敗した俺の事も考えて空気読めよ」

と言わんばかりに、あからさまにユキとだけは視線を合わせず、

「良かった良かった！幸せになれよ〜！先輩か〜。やっぱり年上はいいね！年上は。なっ！」

と、僕の肩を叩く。

いやいやお前も空気読めよ……。と少々感じながらも、

「うん！なんか長谷川さんは年上の人が合いそうだよ。じゃあ今度、どんな人が先輩見に行こうぜ！」

と、同じ年の先輩に興味を持つ。
ハルカも、

「そうだね〜！みんなで探しに行かないとネ！」

長谷川さんは顔を赤くしながら、

「絶対やめてよ〜！」

と言いつつも、嬉しそうだった。

転校してきて約半年。長谷川さんはもう学校に慣れてるんだろうけど、彼氏さんは支えてくれるのかな？長谷川さんの為にも、この恋

愛が長続きして欲しいと感じた。

そんな自分は・・・。

まだ恋愛の”れ”の字も知らない。

友達としての好き？

異性としての好き？

この違いに気づくのはまだまだ先だと感じてた僕に、その答えを教えてください。人がすぐ現れるという事になるうとは、まだ思ってもいなかった2年生の春だった。

第8話：「葛藤」

5月に入り、新しいクラスが活気づくには、時間はそれほど必要ではなかった。

イケメン三上には毎日．．いや、毎時間と喋っていい程に相田が完全マークしている。

相田も三上にハマるんだろうな．．とは正直思っていたけど、級長に立候補し、早速席替えを実行。挙げ句の果てにはその席替えで、級長という立場を利用して三上の隣をがっちりキープ．．。職権乱用にもほどがある．．。

相田の

「好きですアピール」

に、三上も相当参っているらしく、僕もたまに相談？．．グチ？を聞かされている。

また、この時期にはクラスで、毎年恒例の

「委員会」

決めが行われる。

委員会の数は全部で12もあり、基本は1名、委員会によってはクラスから2人が選出される。

1クラスから約15人が何かしらの委員会に入らなければならないのだが、僕は去年ジャンケンに勝って、その入らなくてもいい半数に見事滑り込めた。しかし今年はジャンケンに負け、委員会を選ぶ事になったのだが．．。

どの委員会も微妙というか．．。多分どこでも面倒くさは同じだろうって感じで。

結局、まだ誰も決まっていなかった

「図書委員会」

に立候補し、これから1年間臨むことになった。

委員会初日。学校の授業が終わり、僕は図書委員会の教室になっている図書室へと向かう。

図書室のドアを開けると、すでに総勢14名のメンバーが静かに座っている。

数分後。

担当の教師が入室してきて、自己紹介を終える。早速本題という事で、昼休みと放課後30分の貸し出し受付．．．要はカウンター係のローテーション決めを行う事となった。これは1年生から3年生がシャッフルされ、抽選で決まった2人1組が、指定された曜日の昼休みと放課後に入る。

1年生から抽選のクジをひいていき、僕の順番がやってきた。抽選箱に手を入れクジをひく。

「水曜日」

ひいたクジの紙には、この3文字だけが書かれている。

クジの紙を持ちながら、決まった曜日が記入されているホワイトボードを見ると水曜日の欄に、

「1年4組 坂井真由美」

の文字。

1年生と一緒に、しかも女の子か．．。

考えてみれば、僕の今の学年はみんな年下。けど、自分が「年上の先輩」

だなんて、例え僕の本当の年齢を知っている太田や内田にさえ思われていないだろう。そういった意味でも、

「後輩」

と接する機会が出来た事に楽しみな気持ちでいた。

1週間後の水曜日。

クラス男子の昼食指定席、

「教室前廊下」

で昼食を早々に済まし、図書室へと向かう。

扉を開けると、すでにカウンターで準備をしている

「坂井真由美さん」

らしき人が目に入る。

「あつ、もう来てたんだ。早いね！．．．これからよろしく！」

彼女も満面の笑みで、

「はい！よろしく願いします！」

なんか、面倒くさい委員会入っちゃいましたよね．．．。アタシ、ここ結構楽かな！って思って選んだんですけど、昼休みと放課後が潰れるなんて．．．。ありえないですよネ！！」

「まあ、ちょっとは想像ついてたけどさ。けど、多分どこ行っても大変だったと思うよ。ほとんど座ってるだけでいい図書委員なんて、全然マシだって！」

「うーん、そう言われるとそうかもしれないですネ．．．。あつ、今日の仕事、もう終わらせましたよ！．．．って言っても日誌書き

だけですけど．．．。」

「えっ！終わらせたの！？」

サンキュー！．．．って言いたい所なんだけど、これじゃあ俺仕事覚えられないって！」

僕の正直な感想に、彼女は少々照れながら笑った。

「あつ、そうですね！けど簡単ですよ。だって、日誌に日付と名前、あとはこの

「貸出状況」

って所に貸した本のタイトル書けばいいだけですから！」

「へえ」。マジで簡単！．．．ていうか、めっちゃ暇じゃん！」

良かった．．．。この子、凄い話しやすいかも。2つ年下だからそう思うのか、笑った顔なんて初々しくて可愛らしい。

ここへ来る前、もしなにも喋らない人だったら気まずくてイヤだな．．．っと思っていたから、暇にならずに少し楽しくなりそう！．．．そう感じた。

「じゃあ、また放課後！」

昼休みも終わりに近づき、僕たちはお互いの教室へと別れた。

教室へ戻る途中、階段の踊り場で太田とイケメン三上が目に入る。けど、何か様子がおかしい．．．。

チラチラ上を見ながら明らかに挙動不審。

「まっ、まさか!？」

とは思ったけど、僕は2人に近づいた。

「おゝい!何やってんの？」

僕の声に太田と三上は驚き、同時に振り向いた。

「・・・あゝ、ビックリしたー。田中かよ!いやさ、三上と歩いてたら、ここが絶好のチラ見ポジションだって事に気づいてな!」

お前らは昼休みに何してんだよ・・・。と思いつつ、そこは興味津々。ちゃっかり2人に加わる。

「いいか、田中!さりげなく3人で話してるふりが前提だからな!」

僕は黙って首を縦に振り一言。

「ていうか、もう授業始まるぞ・・・!大丈夫なんか!？」

すると太田は、

「だから今が狙い目だろ!？みんな教室に帰ってくる頃だから。」

そんな話を話していると、上の方から女子の声が・・・!

僕たちはさりげなく見上げながら会話は上の空。

・・・と、そこへ下から誰かが階段を上がってきた!!

「ちょっと!何してんの・・・!今覗いてたでしょー!?!最低!」

ユ、ユキだ．．．！

人間、うしろめたい事をとっさにごまかしたい時に限って、言葉が見つからないというか．．．。それとも僕たちがアホなのか．．．。明らかにわざとらしく3人声を揃えて全否定。

それでもユキには信じてもらえない。

それでもそうだ．．．。わざわざ踊り場で話しこんでる方が不自然で、しかも3人とも視線は上を向いていた。

「あゝ、終わった．．．。正直、紳士的なキャラで1年間売ってきた。いや、こんな事をしていた自分が馬鹿だった。ユキは学年屈指の「歩くゴシップ紙」。もうこれからはエロキャラが広まってもしょうがない。いつそ開き直るっていうのも悪くないかな！」

なんて半分覚悟を決めていると、ユキは意外な言葉を発した。

「どうせ、みずきと三上くんは無理やり太田に誘われたんでしょ？ ホント男子ってそんな事ばっか！．．．うちのお兄ちゃんと考える事一緒だよ。まっ、みんなには黙っててあげますか！」

ん？らしくないな．．．。しかも、イケメン三上が覗き！？こんなおいしいスキヤンダル、いつもならユキは放っておかない。

ユキは小走りに去っていき、残された僕たちも恥ずかしさを抱えながら教室へ戻った。

その最中、明らかに太田のテンションが違っ！ついさっきとは手のひらを返したようにヘコんでいる。

「太田、ヘコみすぎだった！．．．にしても、あんな所ユキに見られるとは思ひもなかったよな！俺たち確実に変態のイメージついたぞ！」

僕は笑い話に変えようと、この重たい空気の状況を打開する。三上もノツてきてくれて、

「だな！．．．けど別にいいんじゃないの？正直、俺はなんとも思われても構わね〜しさ。それとも何？太田はあの子の事好きだったりして！？」

笑いながら太田にツツかかり、おどけて見せる。

．．．おいおい。よりによってその冗談はタブーなんスよ！三上さん．．．。

まあ三上は、とうの昔に太田がユキに告白して、しかも失敗してるなんて思ってもみないだろう。

終始太田は無言のまま肩を落とし、教室へ入っていった。

1時間後。

「よし！やっと今日も終わった終わった！」

「バイバイ！」

「じゃあまた明日ね〜！」

「部室のカギって、今日誰が担当だった？」

「掃除、ダル〜．．．。」

「これからカラオケ行く人〜！？」

「今日お前バイトある？」

授業が終わり、周りからは一斉に声があがる。いつも通りの光景だ。僕は、三上とハルカへ別れの挨拶を早々に済まし、急いで太田をトイレに誘った。

トイレに着き、まだへこんでいる太田を早速鼓舞する。

「どうした？まだユキに見られた事気にしてんの？意外とあいつの方こそ気にしてないと思うぜ」。だってユキ言ってたじゃん！男はみんなそう・・・みたいな。」

すると太田はやつと口を開いた。

「バカ、お前なあゝ・・・。田中は俺の気持ちわからねえくだろうけど、パンツ覗いてる所を好きな子に見られてへこまない奴なんて普通いねゝぞ・・・。」

パンツを覗くというフレーズを真顔で言う太田に、僕は耐えきれずに爆笑。

「ハハハッ！！ちょっとお前、”マジ反省”するなって！

・・・うゝん、まあ別に気にしない事が一番なんじゃねゝの？気持ちちはわかるけどさあゝ。それに、言っちゃ悪いけど、大体そんなもんだってユキも思ってるっしょ！？

しかも、見なかった事にするって言ってたんだし、もうこの話題をわざわざ出さなくてもさ。・・・うん！俺たちは何もしてない、してない！！」

太田の肩を、励ますようにポンと叩いた。すると太田はまだ不満そ

うに、

「田中．．．。お前、あの時ユキの事おかしいと思わなかったか？」

「．．．ん？」

「誰にも言わないってユキが言った事．．．。あいつってあんな性格じゃないじゃん？絶対言いふらすはずだし．．．。どうしてだと思っ？」

何かを知っていそうな、そして悲しそうな顔で僕に問いかける。

「あー、俺もそれ思った！．．．さあ。面倒くさかったんじゃない？」

「．．．違うんだよ。」

「はあ？」

「あの時、俺とお前だけだったら確実に言いふらされてた．．．。実はユキ、三上の事が好きなんだ．．．。だから見なかった事にするって言ったんだと思う。」

．．．あまりにも突然だった。太田はどんな気持ちなんだろう．．．。かけてやる言葉が見つからない。

「えっ、えっ！．．．いやいや、お前考え過ぎ。それは無いって！．．．ただ顔が良いからだろう？なんてったってユキはミ－ハーじゃん！」

「・・・・・・・・。。。」

「なっ！だからそんな事考える必要もないって事！お前、神経質になりすぎ！」

すると太田は、今まで黙っていた事を覚悟を決めたかのように話した。

「・・・・・・・・直接聞いた。ユキが三上の事好きだって・・・・・・・・本人から聞いた。」

「・・・・・・・・マ、マジで・・・・・・・・？」

さっきの比じゃないくらい、かけてやる言葉が見つからない・・・・。それと同時に、ユキが太田にその事を打ち明けるまでの過程が気になる。

「ユキとなんでそんな話になったん？もしかしてお前から聞いた？」

「・・・・・・・・ん？いや、去年の12月頃かな。ユキとメールしてて、好きな人が出来たんだあ・・・・・・・・みたいな。」

速攻聞いたぜ！・・・・・・・・誰？って。そしたら隣のクラスの三上だってさ・・・・・・・・。」

「あゝ、それホントに太田は友達としてしか見られてなかったって事が・・・・・・・・。」

「まあな。だから改めてショックでさ。」

これでやっとわかった。太田が最近ユキの話をしなくなった事、帰る時もユキと駅まで行かないで僕と帰る事。多分ユキは太田の事、最近帰りどうしたのかな？・・・程度で、なんとも思っていないんだろう。

「お前、まだユキの事好きだったんだな・・・。
なあ、太田。ユキに気持ち伝えてみるよ。」

「はあ？三上の事が好きだって言ってたぞ。しかも1回フられててさ・・・。意味ねえし！」

「いや、だから最後に吹っ切る為だって！このまま友達関係でいるって・・・無理だって自分でも気づいたんだろ！？
それで・・・完全に線引け！」

・・・ガタッ！

「おう！こんな所で何話してんの？」

部活を控えたクラスメイト達がトイレに入ってくる。

「ん、いや、密会密会！・・・まっ、じゃあな太田！これから委員会あるから。」

僕は図書室へ向かう最中、ふと考えた。

ユキは三上と話した事なんて少しどころか、全くといっていい程面識もないと思う。それなのに、気になるを通り越して好き・・・？
わからない。本当にわからない！

人って、いろんな違う価値観を持っているんだなあ。それが、人の事を好きになったり嫌いになったり、気が合ったり合わなかったり。もちろん、世の中すべての人が同じ事を思ったり感じたり、価値観も一緒だったら、もしかしたら争い事や恨み妬みなんかも減るのかもしれない。

けど、価値観が違うからこそ楽しかったり、感動したり、個性があったり・・・。

だからこそ人間って面白いなあ〜と感じる反面、時には人を知らない間に傷つけたりするのかな・・・。

ガラガラッ。

図書室の扉を開く。

「あつ！田中さん遅刻ですよ〜！帰っちゃったのかと思いましたよ〜。」

カウンターの椅子に座り、ファッション誌を手に持ち、僕の方を見て呆れ顔。

「ゴメン！ちよつと授業延びててさ。

・・・うわっ！相変わらず人少なっ！無駄に広いのにいつも少ないよね。

ん、その本、家から持ってきたん？」

カバンを床に置きながら、彼女の持っている本を指さす。

「あつ、はい。だって絶対暇じゃないですかあ〜？田中さんも暇潰し持ってきた方がいいですよ！」

僕も彼女の隣のカウンター席に座る。

「暇潰しねえ。図書室にある本で暇潰しになるよ。」

「あつ、そうですか……。田中さんって、何か好きな事ないんですか？」

「うん。最近サッカーにハマっててさ！あつ、観る方ね！」

「アハッ。観る方ですか！アタシはサッカー全然わかんないですよ……。そういえば部活入ってます？」

「部活？いや、入ってないよ。そのかわりバイトしてるけどね。坂井さんは？」

「アタシも入ってないです……。中学の時にバレーやってて、続けようかなあって考えてたんですけどねえ。」

「バレーかあ。俺バレー苦手……。」

「えっ、なんでですか！？めっちゃ楽しいですよー！」

「うん、まあ苦手っていうかトラウマ。中学の時の球技大会でさあ、バレーで決勝まで行ったのね。それで全校の人が見てる前で、サーブ空振りっ！！」

彼女は、こいつカッコ悪っ！……と思ったんだろうけど、そこはもちろん気を使って頂く。

「ええー！？サーブ空振りする人なんて普通いませんよー！．．．
けどそんな人見たかったなあ。」

30分後．．．。

委員会業務初日の今日は、結局仕事らしい仕事は全くせずに終わった。彼女は終始、雑誌読みに没頭。僕はカウンターを離れ、きつちりとジャンル別に整理整頓されている図書室の本をじっくり眺めていた。

へえ。図書室なんてほとんど入った事も無かったけど、今日改めてこの部屋でゆっくりとした時間を過ごしていると、悪くはない。

図書室には木漏れ日が射し込み、吹奏楽部の練習音が僅かながら耳に届く。別に本が好きって訳ではないけれど、ぼーっとしていると心が無になつてとても落ち着く。気持ち悪いくらいとても静かで、けれど苦になんてならない不思議な感覚。学校にはうるさい所しか無いと思っていたから、余計に安らぐというか．．．。学校にはこんな場所もあるんだなあ。考え事なんかしたくなったら、絶対ここに来よう！

図書委員になつた事がキツカケで出会った、この優しい時間に僕はクセになりそうだった。

「田中さあーん！！．．．図書室閉めますよー！！」

図書室の入り口で、彼女は力ギを僕に見せながら合図。あまりにも無になりすぎて、全てが上の空だった僕は必要以上にオーバーアクション。

「ん！、えっ！？．．．ああ、終わりね。ごめん、任せっきりだったね！」

急いでカバンを持ち、彼女の元へ駆け寄る。

「いえ、アタシも雑誌読んでただけですし〜!」

入り口のカギを閉め、

「じゃあアタシ、教務室にカギ返してから帰るんで!」

「・・・あつ、いや待って!俺が返してくる。一つくらい仕事させてよ!」

「えっ!? いいんですかあ? ・・・うん、じゃあお願いしますネ! それじゃあ、お疲れ様です!」

と、彼女は笑顔でカギを僕に差し出し、去って行った。

教務室に向かう最中、進路指導室前で見た事のある顔が。

・・・原田だ!

中学時代からの友達で、同い年の先輩。去年の体育祭では、僕の心許ないわがママを聞いてくれた、僕が頭の上がない男だ。

あの体育祭からは、原田と二人きりにならない限り、廊下ですれ違ってもお互い目も合わさない。知らない間に暗黙の了解になっていたけど、正直やるせない・・・かといってみんなの前で、
「よお!」

と声をかける事も、チキンの僕にはまだ勇気が無い・・・。

原田は何やらプリントを読む事に集中していて、全然こっちは気づいていない様だった。

僕は後ろからそーっと近づき、

「膝カッくん」

。

「うわっ！！・・・ビックリしたあゝ。おう、田中かよ。」

「よっ！真剣な顔して何見てんの？

あまりにも成績悪すぎてこれから説教？」

「お前はアホか！

進路相談だよ、進路相談！！このまま進学するか、それとも就職するかさゝ。クラスで俺だけ進路希望の紙提出してなかったから、これから担任とマンツーマン！！マジだるい。」

「へえゝ、もうそんな時期か。まっ、頑張れよ！」

「お前はまだ2年で羨ましいよなあゝ！来年はそっちが頑張れよ！後輩くん！」

帰り道。

僕はまだ進路なんて全然考えてもみなかった。

なんでこの学校に入ったのか？

「自分のレベルでもなんとか合格出来そうな学校で、ついでに家から近いので。」

じゃあ、復学した理由は？

「高校はやっぱり行かなきゃ！・・・と、判断した為。」

この学校でやりたい勉強は？

「特になし。」

将来の夢は？

「これと言つてなし。」

進学希望？就職希望？

「いや、まだどちらとも．．．。」

あゝあ．．．自分って、全然おもしろくない人間だな．．．。

わかってはいたけど、改めて実感。

ちょっとへこむ．．．。

原田に対して、人の事も平気で傷つけちゃってるし．．．。

ホント情けないよ．．．。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9109a/>

「学生」という名の仕事

2010年12月14日13時47分発行